

令和 5 年 6 月 7 日現在

機関番号：33902

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00180

研究課題名（和文）ウィリアム・スタージス・ビゲローの日米における文化支援活動

研究課題名（英文）Cultural Support of William Sturgis Bigelow in Japan and the U.S.

研究代表者

井上 仁美（井上瞳）（Inoue, Hitomi）

愛知学院大学・文学部・准教授

研究者番号：50779337

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究では、ボストン美術館理事ウィリアム・スタージス・ビゲローの日米における文化支援の業績を取り上げ、ボストン美術館における日本美術コレクションの形成とその位置付けについて、特に仏教思想との関連から考察を行った。

まず1904年のボストン美術館『理事報告書』について、理事ビゲローによる日本美術部の支援と業績を明らかにした。

またビゲローは来日中に、天台宗寺門派の園城寺法明院桜井敬徳から受戒しており、現在も法明院に関係資料が残っている。ビゲローをはじめ、アーネスト・フランシスコ・フェノロサ、町田久成、岡倉覚三（天心）らの書簡や日誌など近代資料の整理解読を行い、考察を加え、調査報告書を刊行した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ボストン美術館の『理事報告書』や書簡類の分析により、日本美術を「小芸術」として美術館の常設展示から外そうとする動きを退けたのがビゲローであったことを明らかにし、日本美術の位置付けに関して、これまで考えられていた以上にビゲローが果たした役割が大きかったことを提示した。

法明院に所蔵される近代資料の全画像と、書簡類の翻刻、英文書下しを掲載する『園城寺法明院近代資料調査報告書』を刊行し、これまで断片的にしか知られていなかった本資料の全体像を示した。法明院の歴史と、明治時代の仏教を通じた日米の交流について多角的に考察を加え、ビゲローが仏教界と日本美術支援に果たした具体的な業績を明らかにした。

研究成果の概要（英文）： This study examines the cultural support of William Sturgis Bigelow (1850-1926), the trustee of the Museum of Fine Arts, Boston, to Japan and the United States, focusing on the formation and positioning of the Japanese art collection at the Museum of Fine Arts, Boston, particularly in relation to Buddhist thought.

The report, "Communivation to the Trustees" of the Museum of Fine Arts, Boston (1904) was taken up to clarify Bigelow's support of the Japanese Art Department and its achievements.

In addition, based on the relationship with Sakurai Keitoku of Homyo-in, Onjoji-temple, from whom received Buddhist teachings during Bigelow's visit to Japan, a survey report was compiled by organizing and deciphering modern materials such as letters and journals of Bigelow, Ernest Fenollosa, Machida Hisanari, Okakura Kakuzo (Tenshin), and others that remain at Homyo-in.

研究分野：美術史

キーワード：ボストン美術館 在外日本美術コレクション ビゲロー フェノロサ 岡倉天心 法明院

## 1．研究開始当初の背景

ウィリアム・スタージス・ビゲローは美術史の分野において、ボストン美術館の大コレクターとして知られる。在外で最大を誇るボストン美術館の日本美術コレクションの礎を築いたのは、明治期に来日したビゲローと、アーネスト・フランシスコ・フェノロサ、そして岡倉覚三（天心）の3人であった。しかし明治の日本美術や文化財保護の確立に関して、ビゲローの存在は従来考えられていた以上に大きい。フェノロサの日本の文化政策における業績や、岡倉のボストン美術館での活動も、ビゲローなくしては成し得なかった。ただ、フェノロサや岡倉の業績に比べ、ビゲローの活動についてはあまり知られていない。

例えば、明治42年に日本政府からビゲローに付与された旭日章の推薦文には、奈良・京都の古社寺の援助、ボストン美術館への美術品の寄付、狩野芳崖と橋本雅邦の支援、といった言葉が並ぶ。この旭日章授与への働きかけを行ったのは岡倉であった。当時このような業績が評価されたビゲローであったが、なぜこれまで注目されてこなかったのだろうか。これは一つに、ビゲローには公の著作が少なかったこともその要因であろう。そのため本研究では、残されている書簡や記録に残る資料から、ビゲローの業績を明らかにしたいと考えた。

また本研究では岡倉、フェノロサ、ビゲローが天台密教に受戒した宗教的側面にも焦点を当て、日米における文化支援の事績を詳らかにすることを試みることにした。美術—仏教—美術館—文化支援をつなぐジャポニスム研究、海外の日本美術受容とコレクション研究への新たな視座を提示することで、延いては現在の日本文化の海外発信への示唆となると考えた。

## 2．研究の目的

### (1) 見過ごされてきたビゲローの社会的・思想的背景の検証

本研究は、従来、単なるパトロンとしてしか認識されなかったビゲローの事績と影響を、日米双方から明らかにすることである。まず、ボストンにおける東洋思想の受容に関する地理的・時代的背景に加え、ボストン美術館で大きな権力を持った理事ビゲローの重要性を検証することにより、ボストンを舞台とした文化支援について考察する。

まず、ボストンというアメリカ入植以来の古い歴史と土地柄を背景に、超越主義、神智学、仏教といった東洋思想が入り混じった様々な思想を許容する背景にも目を向ける必要がある。こうした東洋思想の流布がどれほどアメリカの他の美術館において日本美術コレクションの形成に影響を与えていたのかを比較検討する。

さらにビゲローは、ボストンの富豪で医師の家系に生まれた生粋の「ボストン・ブラーミン（ボストンの上流階級）」であった。美術館の理事となったビゲローは初代日本美術部長にフェノロサを招聘し、その後岡倉覚三も呼び寄せている。つまり、美術館の実力者ビゲローの力なくして、フェノロサも岡倉も活躍の場を与えられることはなかったという事実を、ボストン美術館の経営形態を考察しながら明らかにする。

### (2) 見過ごされてきた仏教徒としての影響の検証

ビゲローは1882（明治15）年から日本に7年間滞在し、天台宗寺門派の圓城寺（三井寺）法明院（滋賀県大津市）の桜井敬徳のもと、フェノロサと共に受戒している。彼が敬徳から受けた教義及び、ビゲローの仏教思想はどのようなものであったのか考察を加える。

まず、ボストン美術館や、法明院の悉皆調査の新出資料によって、ビゲローの仏教思想を明らかにする。仏教徒としてのビゲローの事績を追うには、その仏教思想を知らずして理解することは難しいが、これまで異分野であったため着手されてこなかった課題に取り組む。

次に、古社寺への支援に焦点を当てる。ビゲローが敬虔な仏教徒であったことが、日本における廃仏毀釈で破壊された古社寺への支援となった。フェノロサの京都奈良の古社寺調査に同行して寄付を行うとともに、日本美術を称揚する講演などを行っている。こうしたビゲローの支援活動を詳らかにする。

さらにボストンでも、仏教徒としてのビゲローの影響を見ることができる。ボストン美術館に仏教美術を一つの核とするコレクションが形成され、テンプル・ルームと呼ばれる荘重な「仏像展示室」が残されることになった。この経緯を明らかにすることで、どのような思想がこの展示室に込められていたのか検証する。

## 3．研究の方法

### (1) ボストン美術館における理事と日本美術コレクターとしてのビゲロー

ボストン美術館の理事となったビゲローは、美術館運営に大きな影響力を持っていた。美術館理事としての彼なくしては、草創期のボストン美術館で日本美術が重要視されることはなく、フェノロサも岡倉覚三も、活躍の場を与えられることはなかった。彼の影響力の大きさを、コレクションの重要性という観点からだけでなく、書簡や記録などの一次資料を基に明らかにする。

## (2) 仏教者としてのビゲロー

ビゲローは滞日中に園城寺法明院住職の桜井敬徳から受戒し、仏教徒となった。2017 年から法明院悉皆調査が行われ貴重な新出資料が発見されたが、全ての調査は完了に至っていない。フェノロサやビゲローの仏教思想を解明するうえで重要な一次資料であるため、さらに調査を進め、仏教徒としての彼らの思想について明らかにする。

## 4. 研究成果

### (1) ポストン美術館理事としてのビゲローの存在意義の解明

本研究では具体的に、1904～06 年にポストン美術館から刊行された『理事報告書』1～4 巻を取り上げ、その他の関係資料と突き合わせながら、ポストン美術館における日本美術創設の経緯を明らかにした。これまで本資料が日本美術との関係で精査されることはなかった。しかしこれらの資料調査により、従来は、19 世紀末までに大量の日本美術コレクションが収蔵されたため日本美術部の創設に繋がったと単純に考えられてきたが、実は創設に至るまでのいくつかの重要な議論があり、そこでビゲローの果たした役割は看過できないことを明らかにした。そこには、審美性重視に傾くヨーロッパにおける美術館の理念の転換や、大芸術と小芸術の範疇に入れるべき美術(ジャンル・国)の議論などと絡み、日本美術の位置付けの転換も同時に行われていた。ここで日本美術に西洋美術と対等な位置付けを後押ししたのがビゲローであったということが『理事報告書』を読み解く過程で浮かび上がってきた。

本研究は、学会発表 2 件及び学会誌論文掲載 1 件によって成果発表を行った。本考察は、今後の日本美術の位置付けに関する議論に重要な提起となると考えられる。

### (2) ポストン美術館の「仏像展示室」設置と東洋思想の影響

上記の調査を踏まえ、ポストン及びポストン美術館における東洋思想の影響関係を考察した。『ポストン美術館年次報告書』を精査するとともに、ポストン美術館アーカイブに所蔵されるビゲローや館長、理事長との書簡により、「仏像展示室」設置の経緯を辿った。また、「仏像展示室」には岡倉覚三の影響も大きく、岡倉の著作から仏像の展示に込められた思想を読み解いた。

本件は国際シンポジウム企画及び発表 1 件によって成果を示した。

### (3) 園城寺法明院資料調査による仏教者ビゲローの解明

ビゲローはフェノロサと共に園城寺法明院住職桜井敬徳から受戒し、ポストン帰国後もその後の住職直林寛良と書簡のやり取りを続けた。ビゲローの仏教思想を解釈する上で、彼の『仏教と靈魂の不滅』(1908 年)は重要な著作物である。これに加え、彼の仏教思想がどのように形成されたのか、行間にある思想はどのようなものだったのかを明らかにすることができるのが法明院に残される資料である。

法明院にはビゲロー、フェノロサをはじめとする多くの書簡や写真などが残されていたが、これまで研究者によって一部が取り上げられるのみで全貌を把握することはできていなかった。今回法明院の近代資料について悉皆調査を行い、『園城寺法明院近代資料調査報告書』として刊行した。本報告書には、法明院に残される桜井敬徳、直林寛良、町田久成、ビゲロー、フェノロサ、岡倉覚三に関わる書簡と写真を中心に、近代資料の画像と翻刻を日英文で全掲載した。

これに加え、「法明院の歴史と文化財 フェノロサ、ビゲロー前史」(大津市歴史博物館学芸員 鯨井清隆)「法明院近代資料の概要 ウィリアム・スタージス・ビゲロー関係資料を中心として」(井上瞳)「ウィリアム・スタージス・ビゲローとアメリカ人仏教徒の形成」(ポストン大学 マルコム・デビッド・エッケル教授)の 3 本の論考を日英文で掲載した。これらにより法明院資料を歴史的に把握しつつ、日米における同時代の宗教史上に位置付けて検討することができ、本資料の重要性を多角的に提示することができた。

本件については学会発表及び講演 2 件、学会誌論文掲載 1 件、調査報告書刊行 1 件により研究成果を示した。

以上、上記 3 点について調査研究を遂行し、国際シンポジウムを含む学会発表及び講演 4 件、論文掲載 2 件、調査報告書の刊行 1 件により研究成果を発表した。コロナ禍の為、当初予定していたポストンでの調査を行うことができなかったが、本研究で取り組んだ法明院悉皆調査による一次資料に加え、ポストン美術館付属図書館のアーカイブから取り寄せた書簡類、国内やオンライン上で閲覧できる一次資料等を用いて成果とすることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 井上 瞳	4. 巻 第46巻第2号
2. 論文標題 ボストン美術館設立理念の方針転換と日本美術の位置付け 1904年『理事報告書』にみるウィリアム・ピ ゲローの役割	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 博物館学雑誌	6. 最初と最後の頁 21-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井上 瞳	4. 巻 43
2. 論文標題 法明院近代資料調査報告 フェノロサ、ピゲロー関係資料を中心として	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 LOTUS	6. 最初と最後の頁 41-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件／うち国際学会 1件）

1. 発表者名 井上 瞳
2. 発表標題 近代欧米の博物館における日本美術の収集と位置付け
3. 学会等名 全日本博物館学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 井上 瞳
2. 発表標題 1909年ボストン美術館「仏像展示室」設置に関する考察
3. 学会等名 ジャポニスム学会（国際学会）
4. 発表年 2021年

1．発表者名 井上 瞳
2．発表標題 20世紀初めのボストン美術館における展示形式の転換 1904年『理事報告書』を中心として
3．学会等名 全日本博物館学会
4．発表年 2021年

1．発表者名 井上 瞳
2．発表標題 ボストンからの書簡 三井寺法明院資料から見るフェノロサ、ピゲロー
3．学会等名 大津市歴史博物館・フェノロサ学会（招待講演）
4．発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1．著者名 井上 瞳、ほか2名	4．発行年 2023年
2．出版社 -	5．総ページ数 188
3．書名 園城寺法明院近代資料調査報告書	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	デビッド・エッケル マルコム  (David Eckel Malcolm)	ボストン大学・宗教学・教授	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	鯨井 清隆  (Kujirai Kiyotaka)	大津市歴史博物館・学芸員	
研究協力者	鈴木 乙都  (Suzuki Oto)	愛知学院大学・大学院	
研究協力者	久保 慎一郎  (Kubo Shinichiro)	愛知学院大学・大学院	
研究協力者	釜丸 祥  (Kamamaru Sho)	同志社大学・大学院	
研究協力者	瀬川 なおみ  (Segawa Naomi)	同志社大学・大学院	

## 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

## 8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
米国	ボストン大学			